

トランスナショナル社会運動の興隆と衰退に関する比較研究

上智大学／日本学術振興会(DC2)

龍野洋介

社会運動の波が世界各地で発生している。例えば、2011年にウォール街を起点として始まったオキュパイ運動はアメリカのみならず欧州、アジアへと普及している。こうした状況に鑑みれば、現代の社会運動の1つの特徴として、従来ローカル／ナショナルなレベルに限定されてきた活動や参加者の問題意識が、グローバルなレベルで共有されていることが挙げられる。本研究報告では、こうしたローカル／ナショナルな問題意識とグローバルな問題意識の接続、ならびに運動のトランスナショナル「化」とその後に着目し、検討をすすめる。

トランスナショナル社会運動を扱った研究を概観してみれば、その多くが運動の最も活性化した瞬間、すなわち、国際会議などで展開される大規模プロテストに焦点を当てる傾向がある。そのため、運動の興隆や衰退といった変化過程の理解が進んでいない。この過程を解き明かすことがトランスナショナル社会運動を紐解く鍵の1つと考える。トランスナショナル化した社会運動の興隆と衰退を分かた原因は何か、これが本報告の問いである。

この問いに答えを出すために、本報告では社会運動理論、及び比較研究を採用する。まず、政治的状況ならびに資源に着目する構造要因、参加動機や問題意識の構築過程に着目する行為要因、そしてこれらを接続しうる文化的要因の3点を整理し、分析デザインを構築する。次に、トランスナショナル化した後に、継続的に展開されている運動と衰退傾向にある運動を経年比較し、差異を生み出した要因を析出する。具体的には東京都での反原発運動と山口県での反原発運動を取り上げ、それぞれの運動と団体を観察し、比較考察を進める。本報告では資料調査、及び運動組織へのインタビュー調査からデータを収集する。

考察を通じて、以下の結果を得た。第1に、国際会議やシンポジウムなどのトランスナショナル空間から新たな知見を獲得し、対象とする現象に普遍的な解釈や理解を設定し、幅広い支持を獲得することが運動継続の条件であることを発見した。第2に、運動の抗議対象、運動をとりまく環境などを運動参加者がいかに意味づけるか、この差異が運動展開に違いを生み出すことを捉えた。とりわけ、文化的要因である風習、景観、これらに由来する解釈は、それぞれの運動間での多様な関係性の変化や動機の差異を生み出していた。

本研究の理論的貢献は、文化的研究の有効性を示唆することにある。グローバリゼーションの深化とともに画一化が進む現代社会において、そこで暮らす人々の多様な価値観や問題意識の構築、普及の過程は不明瞭なままである。社会運動の文化的研究はこうした多様な価値観や問題意識がいかなる経路を辿ってきたのかを明らかにする。